

蕾の儘に  
地に落る。

ふみに見る君

文に見る君  
何故、殊更に美しく飾立る。  
美しきは寂し  
そは、唯、悲しく胸にせまる。

逝く春と共に  
消えうせて  
影だもとめず  
散果る。

寂しさつのもり  
遺瀬無く  
手植の花に  
近すけば

ふみに見る君

美しき絹すれ、うすものに隠れる冷たき眸  
かたくななる身には近倚れず  
別途の言葉は暖かなりしかど

文に見る君

悲しき飾を捨てよ

又逢ふ日の来るまで

遙におののく、われを暖めよ。

### 忍び倚るもの

新しき敷布の悲しき刺戟

鼻をつくカルボール。

天鷲絨のカーテンの揺けば

臉とさすも眠に入れず

軽き足音にも頭の痛む。



密かに忍び、細れる寢息嗅ぐは誰ぞ  
老たる母なれば、眠につかれ  
氣遣ふ戀人なれば、眠を裝わん

細目に見開く眸にうつるは

沈黙にかへるカーテン

眞夜中に寢息覗ふは

窓より忍ぶ、青白き月のほのめき。

初戀

初て得たる花なれば

君の賜ひし花なれば

風にも見せず、日に當てず

獨、ひそかに眺めしに、

愛しくばこそ觸れもせず

息もかけずに眺めしに、

薫も失る、色も褪す、  
萎みゆく花、如何にせん。  
花多数あり、萎みなば  
代りの花をとらする、と  
わが喜びも悲しみも  
知らぬ、あまりに多き人。

硝子の圍

晝の明るさ、すがすがしさ  
如何な思案にくれ給ふ、君よ  
梢の囁、小鳥の集ひ  
待ちたる春の來たれるに。  
其の優しさ、麗しさ  
何を思ひ煩ひ給ふ、君よ



紺青の眸に見ずや若葉を  
紅の耳元に聞えずや小唄。

憂ひの眸、啞の耳

醒めよ、と觸れば

若き日に、春風も小鳥の唄も聞かず、衰れ  
硝子の團に閉されし君。

鶇  
鶇

漣起す風も無き、春の日

湖の邊、緑の褥に、

罪知らぬ人は眠につける。

羨しき熟睡うまひ、我も入りたし。

水に寫る山影重し  
岸に生えるあしの葉も濃し  
さるを

罪の身には眠れず  
と、鶺鴒かひつばり水に潜る。

淀  
み

ふたりうつりし

淀みには

夕暮寂しき

我ひとり。

果敢無くも浮く

花びらの

飲けたるあとを

弔える。



紅

我が心、見たしと言ふ君の悲しや

『見せん』と誓ひたれどすべもなし

明<sup>あか</sup>き眞晝、鋭きメスを弄ぶ。

血潮湧き返り、出る隙も無ければ

水室<sup>みづむろ</sup>に狂ふ、海豹のごと

薄き皮膚のうちに苦しき響を傳ふ

狂えるメスのふれし指先

抜くより早く、生臭き血のにほひ

滾々と絶えざる其の逆り。

『おお君、心を見せん』此紅。



大正拾四年拾二月卅日印刷  
大正拾五年一月五日發行

(定價壹圓拾錢)

著者 咫 香 端

東京府下北豐島郡巢鴨町一二九〇

發行者 福田 桂 次 郎

東京市神田區表神保町三番地

印刷者 梅 津 英 吉

版 權 所 有



東京市神田區表神保町三番地

大賣捌所 自然社

圖書出版

振替東京三五五一〇番



終